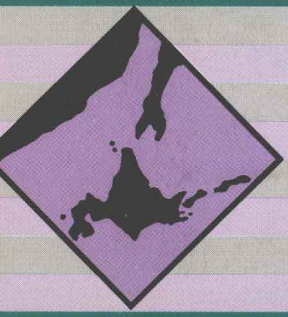
コースチャから北方領土へ

■ひらかれるソビエト極東と北海道

ОТКРЫТЫЙ ДАЛЬНИЙ ВОСТОК ДЛЯ ХОККАЙДО



NHK札幌放送局
日ソプロジェクト 編

コースチャから北方領土へ

■ひらかれるソビエト極東と北海道

マガダン州
ベーリング海
ヤクート自治共和国
マガダン
カムチャツカ州
ペトロパブロフスク
カムチャツキー
ヤクーツク
ハバロフスク州
オホーツク海
千島列島
サハリン州
アムール州
ユジノサハリンスク
ハバロフスク
ブラゴベシェンスク
札幌
アムール川
バイカル湖
沿海州
ナホトカ
ウラジオストク
日本海
● は州都

国後島（くなしり）
択捉島（えとろふ）
（しこたん）色丹島
月殺島
多楽島（たらく）
志発島（しぼつ）
勇留島（ゆり）
秋勇留島（あきゆり）
水晶島（すいしょう）
ノサップ岬
歯舞群島（はぼまい）

ソビエト極東地域

扉を開いた幼い命

コンスタンチン君 命のリレー

8月28日　ユジノサハリンスク空港に初めて降りた日本のＹＳ11型機と、歓迎をうける医師団

8月28日　ＹＳ11型機の中で治療をうけるコースチャ

8月29日　到着翌日の
コースチャ

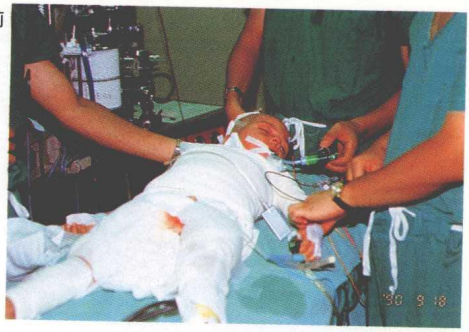
8月30日　手術前にコースチャの頭をなでる金子教授

小さな体で何度も
手術をうける
（9月18日の手術）

9月9日　待ち望んでいた
母親タリーナ さんと再会

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

9月18日　4回目の手術直前



10月19日　特製の体重測定ベットに乗って。おとくいのピースサインが出た

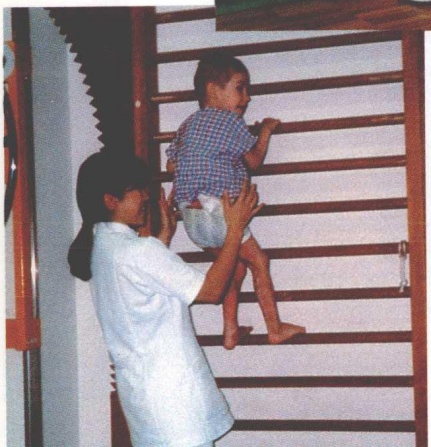
10月19日　お気に入りのミニカーで遊ぶ

10月24日
父親イーゴリさんに支えられて歩く練習

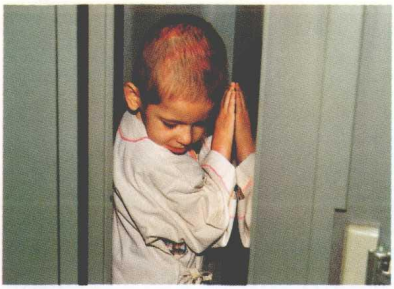
10月24日　母親タリーナさんに車いすを
押してもらってごきげんのコースチャ

10月24日　ＩＣＵの治療を
終えて一般病棟へ
医師団の記者会見

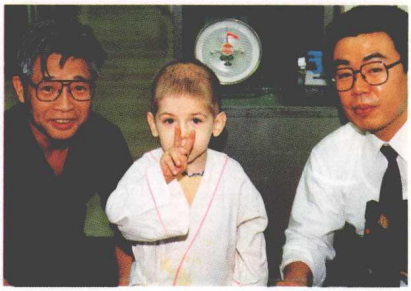
11月19日　ボールを使ってのリハビリ



11月19日　はしご登りもできるようになった



ちょっと目をはなしたすきに、ロッカーに
かくれようとするコースチャ



Vサインはトレードマークになった

11月22日　いよいよ退院
はしゃぐコースチャ

12月24日　サハリンで金子
教授と再会するコースチャ

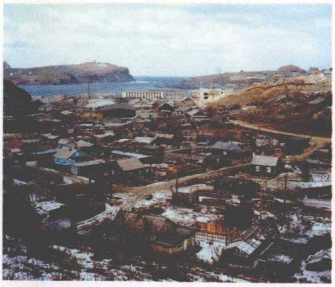
〔写真提供〕金子正光氏・札幌医科大学

サハリン・チュレーニー島のオロロン鳥の群れ
ここで10万羽が繁殖する

サハリンの自然

ヒオウギアヤメ
日本と同じ花が多い

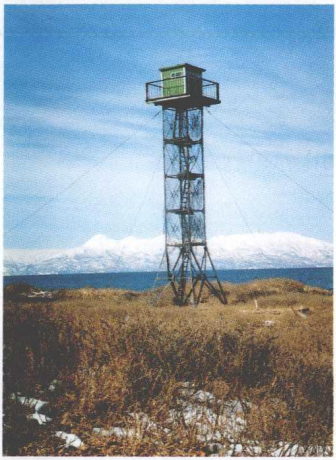
チュレーニー島に繁殖のため
集まった6万頭のオットセイ



色丹島遠景

日本語を学ぶ学生達（色丹島）

知られざる北方領土



監視塔越しに北海道を望む（水晶島）

国境警備隊の若者達（水晶島）

国後島遠景

海をすぐ後に露天風呂を楽しむ人々
（国後島）

巻頭言

日ソ新時代を祈って

コンスタンチン君のやけども癒えて札幌医大病院からサハリンに帰国し、北海道の多くの人たちがこの暖かい人間愛のドラマを通してソ連極東地域との新しい時代の到来を感じていた頃、私はサハリンで国際社会の冷厳な現実を思い知らされる立場を経験していた。

「日本があくまで四島返還に拘るなら百年たっても解決はない」

「大統領は地元と相談なしに何もできない。彼から領土を返還しようという提案はあり得ない」

「ソ連は沈みゆく船だ。しかしトップはそれを知らない」

「隣の日本人と仲良くしたい。しかし貧しいからといって憐れみはうけない」

……一九九〇年十二月中旬、私が訪れたサハリンの行政や政党の責任者達の口から次々に出た言葉である。さらに自由な立場の市民からは、激しいゴルバチョフ批判を多く聞かされた。ゴルバチョフ体制はいつまでもつのか。彼ははたして日本に来られるのか。北方領土問題に前進はあるのか。次々に疑念が湧いてきた。結局ゴルバチョフ大統領は四月十六日に来日することが決まったが、私がサハリンから帰国したその当日にシュワルナゼ外相（当時）の辞意表明、バルト三国の紛争とつづき、疑念が現実のものとなり、ソ連社会の混乱、混迷の度合は深まっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ている。

ＮＨＫ札幌放送局は昨年七月、ソ連極東のサハリン州（北方領土を管轄）、沿海州、カムチャツカ州の三つの放送局と協力関係を結び、相互の取材協力、放送番組の交換などの約束を交わした。この協力関係により両国の間の目に見えない大きな壁をのり越えて、前述のコースチャ報道に大きな成果をあげたほか北方領土についての地元住民の考え方、将来を模索するソ連極東の人たちの苦悩などソ連社会の実態を取材することができ、四十時間にのぼる特集番組を編成して全国的に高い評価を得た。私どもＮＨＫ北海道がソ連極東地域との放送交流を始めたのは、ペレストロイカのムードのなかで北方領土問題に関する報道取材を一気に強化したいというのが一番の理由であった。さらに混乱が伝えられるソ連社会の現状を報道すること、北海道の発展のために両地域の経済、文化交流を促進するお手伝いをしたいと考えたからである。

ソ連社会の行末を憂慮する声が強いが、将来北海道と地理的に一番近いソ連極東地域がお互いに手を携えて助け合って発展を図る時代がくることはまちがいないと思う。

本書が両地域のそうした新しい時代への幕開けを告げた記録となることを念じている。

平成三年三月

ＮＨＫ札幌放送局

局長　永　井　武　司

まえがき

『ソビエト極東へ』　ＮＨＫ北海道の取り組み

一九九〇年八月二十八日午前六時。札幌の空は晴れ渡り、夏の太陽で街はあかね色に染まっていた。人影の無い大通り公園のテレビ塔北隣りに建つＮＨＫ札幌放送局。その二階のニュースフロアーには、早朝にもかかわらず、多くの人影が動き、全体が軽い興奮につつまれていた。ニュースデスクの電話に伝えられる情報によれば、早暁、札幌丘珠空港を発ったＹＳ11型機は、濃霧のためサハリン（旧樺太）のユジノサハリンスク空港にまだ着陸できず、すでに上空を一時間も旋回中で、あと二時間もすれば燃料切れとなり目的の瀕死の三才のコンスタンチン君を乗せることなく日本に舞い戻ることになるだろうと告げていた。テレビ副調整室に並ぶブラウン管には、深夜の連絡で招集されたＮＨＫの中継スタッフによる丘珠空港と札幌医大からの生カメラの映像が写し出されていた。だだっ広い丘珠空港の滑走路の脇には、まだ見ぬ異国の幼児を搬送する為のヘリコプターが待機しており、受け入れの札幌医大では廊下を病院関係者が時折せわしげに歩いている。順調に行けば日本に舞い戻っているはずの午前八時、ＹＳ機が、父親に付き添われたコンスタンチン君を乗せてユジノサハリンスク空港を離陸したとの電話が届いた。

毛布につつまれたコースチャが丘珠空港でＹＳ機からヘリコプターに移されさらに報道陣で

埋まった札幌医大のヘリポートに鮮やかに着地した午前九時十分、狭いテレビ副調整室で一部始終を全国に放送していた三十人余りのスタッフからどよめきが起き、何人かの目に涙が光った。これはどういう感動なのだろうか。ともかく、この日からコースチャは全国民の関心の的となり、サハリンが日本人にこんなに身近な地名であることを、百万言を要することもなく教えたのだった。

私達NHK北海道のスタッフが、ソビエト極東やサハリンを取材の対象として本格的に意識しはじめたのは、ここ数年、とりわけ去年の夏以降のことである。それまでは宗谷岬に立って北を見る時、そこにあるのは「銃口」だった。大韓航空機が撃墜されたのはサハリン上空である。晴れた日、延々と横たわるサハリンの島影に、思わず目を凝らすのは軍事レーダーの姿であり、目前に広がる国境の海に潜水艦の姿を捜す。歴史に詳しい人にとってサハリンはとり残された朝鮮民族の住む、戦後処理の終わらない嘆きの島で、コースチャ一家のような家族が住んでいることを連想する人はまず居なかった。マスコミ関係者が取材でソビエトに入るのも困難で、たとえすぐ目の前に見えてもサハリンに入るには地球を半周してモスクワの中央機関の許可をとらないと不可能であった。終戦までコルサコフ（大泊）との定期航路で賑った稚内港のシンボル白亜の波止場が外国航路に供されず、四十五年間波に洗われているのを見るにつけ、緊張の構造はこのまま永久に続くとさえ思われた。

新たな展開は去年の七月、堰を切ったように急に始まった。NHK札幌放送局の求めに応じてサハリン州と沿海州（ウラジオストク）のテレビラジオ委員会の二人の議長が来日し、札幌局で放送協力協定の調印が行われた。折から北朝鮮の国旗を掲げて操業していた日本漁船がナ

ホトカに抑留される事件が起き、地方のマスコミにも否応なく国際化の波が押し寄せてきていることを身にしみて感じさせられた矢先でもあり、放送協力協定にはまず、撮影したビデオテープを衛星を使って伝送することや、取材の便宜を供与し合う体制をつくることが盛り込まれた。また、これまで別世界に住んできた両地域の国民が、今後、相互理解を深めてゆくために、取材クルーや番組の交換をすることも約束された。

協定調印の話し合いの中で、ソビエトで起きつつある変化についてわれわれの予想をはるかに超える話がいくつも飛び出した。なかでも次の様な発言には一同目を見張った。

「今、ソビエトを改革の嵐に導いた諸悪の根源は『独占』である。権限も利益も全てモスクワが握る『独占の体制』が国民の意欲も夢も喪失させた」

「自立こそ再生の源だ。サハリンテレビ局も近々モスクワからの財源を断って、コマーシャルで自主財源を確保しながら、ニュースや番組をつくる」

われわれが、「一体、社会主義経済の中で、誰がコマーシャル料を払うのか」と質問すると、「今サハリンに次々と誕生している民間企業が支払うのだ」という答。われわれはソビエトが計画経済から市場経済に移行しようとしているとは聞いていたが、社会主義そのものを見直すとまでは考えなかっただけに当時はさっぱり理解出来なかった。しかしこの答は本書の「サハリン経済改革」をお読みいただければわかる通り、サハリン州の知事はまず資本主義を達成した後、本当の社会主義を築くことを真剣に考えていた。

こうしたつみ重ねの中で、われわれは現代ソビエトの動きを正しく理解するにはモスクワの情報だけに頼っていては、誤りを犯す。地方の小さな動きを凝視することこそ重要であり、そ

れは同じ地方局同士だからこそむしろ可能だ、という確信が芽生えてきた。十二月から旭川局の高木記者をユジノサハリンスクに駐在させることに踏み切ったのもこうした確信に基づくものであった。

いま、何も知らずに始まった一地方放送局の海外取材への小さな挑戦が、現代世界史の大きなうねりの中で、巻末の別表のように僅か半年の間に、自らの限界を遥かに超える実績を残すことになった。この蓄積は、四月のゴルバチョフ大統領の来日に向けて真価を発揮することともに、国際化の中で地方放送局の果たす責任と可能性を新たに指し示すことになると確信している。

NHK札幌放送局
日ソプロジェクト
事務局長　山本　博之

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.